

## 【月例研究会】

## 英作文で何を狙うのか

## What Do You Want to Focus on in English Writing?

小林ひろみ（元文教大学教授）

## 1. はじめに

2012年の11月の朝日新聞で、「日本人的な感覚で、これを言ったら馬鹿にされるとためらうと、その一瞬が差をつける。人種や宗教などの異なる背景を持つ人が集う場では、言わないで理解されることはありえない。言葉にしたことがすべてで、行間を読むはない」とフランスの原子力庁で研究員の経験のある脳科学者が述べていたが、ライティングではどうだろうか。確かに科学関係の論文であれば、その通りかもしれない。だが手紙や文学作品などでは行間もニュアンスもあるし、スタイルの問題もあるだろう。思い出されるのは子供の頃に夢中になって読んだ『アルセーヌ・ルパン』や『モンテクリスト伯爵』などの冒険本だ。大人になってから本格的な訳本を読んだところ、全く面白くなくて読み終えることができなかった。

気象学を専門にしていた私の父は、日本の多数の優れた論文が英語でないために世界的に認められていないことをよく嘆いていた。その影響もあって、私は日本語を英語にする翻訳家になろうとアメリカで **creative writing** を専攻した。しかし、実際に翻訳をいくつか手掛けてみて、自分の能力に限界を感じざるを得なかった。さらに追い打ちをかけられたのは、日米開戦の一つの理由は「日本が必要とする石油」を英文にするときに、「必要」の意味に「よこすんだ」といった響きのある **require** を使ったからだ、と書いていた人がいたことだった。私も同じことをやっただろうと思うと、ぞっとした。どのような英語にすれば一番適切なのかを判断するには、2つの言語を厳密に理解し、その文の目的が何かをきちんと見極められる能力が必要だ。自分の文であればどんな英語で書こうと自分の責任ですむが、他人の文となるとそうはいかない。A translator is a traitor.にならないために、私は翻訳家になることはあきらめ、学生には申し訳ないが教師になった。

## 2. ESL と EFL の差

専攻の関係から英作文クラスを持たされることがよくあり、はじめは英文科の学生を対象に教えていたので、全体的な内容を相手に印象付けるための文の全体構成、発展のさせ方などの指導を中心としていた。しかし、英語専攻ではない国際学部の学生を教えるようになってからは、一つ一つの文の正しい書き方など、英語の基礎から始める必要に迫られた。そこで、バイリンガル教育がヒントになるのではと少し調査したことがある。そのときロスアンジェルス教育委員会から自然言語の発達過程を示す資料を入手した。はじめに「聞く」が発達し、次に「話す」「読む」「書く」の順序で伸びていき、この4つの能力がほぼ同レベルになったときに、外国語を母語としている子供たちを普通クラスに組み込む準備ができるということだった。この資料は、ある時点で「読む」が「話す」を超えるが、「書く」は最後まで最初の3つの能力を超えないことを示しており、「書く」能力の習

得の難しさを改めて痛感させられた。

と同時に感じたのは、この調査はバイリンガル環境の子供たちを対象としており、ほとんどの日本の学生は ESL 環境ではなく、EFL 環境にいることだ。ともすれば EFL は ESL の初期段階のようにみなされる傾向があるようだが、英語を学ぶニーズがないということはそれほど単純なものではないし、「なくては生活できない」と「あれば便利」は非常に大きな差がある。まして日本の場合、多くの場合「あれば便利」さえも感じられず、「なくても生活できる」のだ。「やる気」や「根性論」だけで解決しようとするには無理がある。近年、国際的な場で通用するための「話す」が非常に重要視されているが、「書く」必要性はそれに比べるとぐっと少ない。しかしながら外交やビジネスの最終締結は「契約書」であり、そのための英語力は欠かせない。当然のことながら、「書く」ためには「聞く」「話す」「読む」の3つの基礎が必要となる。だが、母語の便利さにどっぷり浸かった日本では、現在のようにメディアが発達し、特に「聞く」「読む」のアクセスの機会是对応しきれないほどあっても、積極的に英語に取り組むインセンティブは少ないのが実情だろう。つまり日本の英語教育の現場で英作文を教えるということは、多くの場合、書くための3つの土台が危うい学生を対象とすることになる。その中で教師は何ができるのだろうか。

### 3. 英作文は和文英訳ではない

日本人英語教師の間で強い人気があるのは、和文英訳の手法である。英文例にならって単文を書かせるものが多く、事実、高校のライティングの教科書は基本的にこの形式のものが一番よく売れる。マニュアルに解答例があるので、答を板書させて全体チェックするだけで済み、ネイティブ・スピーカーではない不安感も解消してくれる。確かに、パターン・プラクティスとしての効果はあるが、この手法には大きな欠点がある。英作文とは主題を英語でまとめていくものであり、そのプロセスで短文・単文がつながっていくことはあり得ても、和文英訳の例文だけを数珠つなぎにして書いていくものではない。英語と日本語では文章構成にも大きな差があり、「縦のものを横にする」置き換え作業ではない。

かつて、「私は日本語でしか考えられないのだから、日本語で作文し、それを英語にするのが正しい」と強く主張する学生に苦労したことがある。こういう学生は自分の書いた英語を日本語に戻して解釈するので、文のおかしさを指摘しても、「文法的に正しい」と譲らないことも多い。対応策として私が近年とっている手法は、コンピュータの翻訳機能を使用し、直訳的な文のおかしさを実際に経験して理解させることで、これを英作文の導入クラスとして実施している。コンピュータの普及により、スペルチェック、グラマーチェックや編集機能を活用した方が便利で実用的なので、作文だけでなく英語の授業はすべてコンピュータ教室で行っている。ソフトの修正があるので、授業前に訳文を確認しておく必要があるが、クラスをいくつかのグループに分けてエキサイト、Googleなどの無料翻訳サイトを割り当て、訳文を比較・検討させる。以下、は授業で使用したいくつかの例である。

[例 1] 「ひっくり返った」→It reversed. / Overturned.

主語のない典型的な和文で、勝手に it が挿入されることが多く、動詞だけが提示される場合もあるが、人が「ころんでひっくり返った」場合は、I fell on my back.などのほうが適切なので、collocation の説明にも使える。

[例 2] 「母は甘党です」→My mother is a sweet tooth. / My mother is a person having a sweet tooth.

イディオムの *have a sweet tooth* については、ネットで主語が複数の場合 *Children have sweet teeth* などの例文を探させ、単数・複数を意識させる。さらに *Be* 動詞は基本的に [=] であることの説明に使用。

[例 3] 「雨が降りそうだったので、傘を持っていった」→ *Since it looked like rain, the umbrella was brought. / Since it was going to rain, I bring an umbrella.*

重文の例で、「傘を持っていった」の訳文の誤りは学生も気づくが、*it was going to rain* は「雨が降ることに決まっていた」のニュアンスがあることを指摘し、さらに、状況の少し異なる「雨が降ったので、傘を持っていった。傘を持っていった」などを試させる。例 5 の目的とも重なるが、細かい日本語の差が厳密に英語に反映される（できる）とは限らないこと、また動詞にもいろいろな表現が使えることを理解させるためである。

[例 4] 「私の父は煙草をすいませんが、兄はすいます」→ *Although my father does not smoke tobacco, an elder brother inhales. / My father does not smoke, but the older brother breathes it. / My father does not smoke, brother sucks.*

*smoke* だけでよいのに *tobacco* まで入れてしまうと「それではドラッグをやるのか」といったことを連想させる。「すいます」はこの場合 *my bother does* でよいのだが、日本語に引きずられて *inhale, breathe, suck* などを使用して奇妙な文になっている。特に *brother sucks* は *informal* には「いやな奴だ」となる。また「兄」については *the/a* のどちらを使うかで家族構成に差があることなどを説明し、冠詞の使い方にも注意を喚起する。

[例 5] 「つべこべ言うな」→ *Don't make excuses. / Don't complain.*

これは、日本語にとらわれず、内容に焦点を当てさせるためのエクササイズとして使用している。意味の近い「ぶつぶつ言うな」や「文句を言うな」を入れさせると *Don't complain. / Stop grumbling. / Stop muttering.* などとなる。しかし、もう一步発想をかえると、こういった表現は、「やれ・やるんだ」と相手を促すときに使う場合も多く、それなら *Shut up. / Just do it. / Shut up and just do it.* などでも差支えないことになる。

#### 4. 英語で言えることを言う

以上の作業から見えてくるのは、語順を中心にした最低限の文法の必要性である。ただしそれは「意味が通じるかどうか」を主眼とし、たとえば今では見かけない、擦り込むと消える化粧用の *vanishing cream* の *vanishing* が名詞か分詞かなどと議論することが目的ではない。ネスミがこの中に飛び込んで透明になる子供マンガを見たことがあり、ここでは *cream for vanishing* と名詞用法だろう。

さらに、ネイティブの先生を中心に、辞書を使うなど主張する人もままあるが、語彙や例文がたくさんインプットされていない日本人にはこれは無理だと私は思う。むしろ、日本語に対応する適切な英語が見つからないと思ったら、別の日本語で言えないか考えさせる、複雑なコンセプトは単純な文に分解して言い換えさせる「和文和訳」をさせて、そこから英語にもっていくほうが容易である。たとえばさきほどの「甘党」だが、この日本語のイディオムは言い換えれば「甘いものがとても好き」だから、これで英語にすれば *My mother likes sweet things.* などが出やすくなり、これで言いたいことは十分言えるだろう。

自分の考えや主張を表現するのは日本語でさえ難しい。まして外国語でするのであれば以下の 4 点が英作文をする際の私自身のモットーである。

- ▶基本アイデアは日本語で考えてもよい
- ▶日本語の言葉にこだわらず状況を英語で表す
- ▶100%を求めない。言いたいことの半分が英語で言えればよい
- ▶日本語のニュアンスは出せないと覚悟する

## 5. 英語的発想への転換手段としての英作文指導

英語で表現するという事は「英語で納得させられるかどうか」がポイントとなり、英語的な論理構成や文の書き方に慣れる必要がある。そのための有効な訓練方法として、guided composition の一種としての summary を推奨したい。たとえば、短い英語の音声ファイルと、聞き取りの理解を助けるために英語の質問を文字ファイルで用意し、一定時間内にそれをまとめて話の筋を書かせる方法がある。音声を使うのは、英文和訳にこだわる学生に日本語を排除して英文のパターンのインプットをするためである。先生の負担も少ない有効な方法である。内容が高度で音声だけでは理解が難しいレベルに達したら、シンプルな言い回しだが聞き取りにくい必要表現などを重点的にチャンクで穴埋めさせて原文を完成させ、次に要点について英語による質問を与えて要約させる方法もある。

英作文が上手になるには日本語も含めた読解の充実が欠かせないし、多読やディベートの訓練も必要だ。特に日本人学生が弱いのは、理由をあげて説明・主張することである。そこで私は裁判物を必ず一つ用意するようにしている。たとえば暴行を受けた際にけがをさせられたが、信仰上の理由から輸血を拒否して死んだ少女のケースである。自分が裁判員であったとしたら被告にどのような判決を出すかと尋ねると、He is guilty.だけの答えが少なくない。これに対しては Guilty of what? Rape, assault, murder, or all of them? と聞く。次に多いのはこれに Because she died. と続けてあるものだが、Wasn't it suicide? Didn't she choose to die? などと反論して考えさせている。

適切な summary とはポイントをまとめて自分の英語に書き換えたもので、学生のレベルが高ければこれを主眼にすれば、レポートや論文の指導の助けになる。しかしそこまではない学生には、原文を無修正でつなぎあわせてただでは、前後関係が崩れて意味が通じなくなるので修正が必要であることを指導すれば、これが応用力につながっていく。

もちろん文の目的と誰を対象に想定するかも重要なポイントである。たとえば美辞麗句が並べられているが、価格の提示がなく、具体的情報は老眼の人には読めない極端に小さな文字の老人ホームの広告は落第である。もっとも、summary 以外は chronological order, cause and effect などの文の目的に合わせたごく少数の手法を使って、2つないし3つのパラグラフを構成までもっていくので手いっぱいであることも少なくないが、ここまでできれば一般的には電子メールに十分活用できるだろう。

最後になったが、EFL 環境で育った通常の日本人が「英語だけで勝負しようとするれば負ける」と私は思う。外国語はあくまでも外国語であり、母語のように自由に使うことはできない。では絶対に勝てないのだろうか。勝負は中身である。日本からもノーベル賞受賞者が出ているように、日本的思考や日本文化を背景にした別のバックグラウンドを武器に英語の世界で戦うことは可能である。しかし、それを英語で理解させるには準備と訓練が必要である。これは不公平である。だがその不公平を乗り越えていかなくてはならないのは日本人だけではない。世界には英語を母語としない人々が山のようにいるのだから。